

## 郷土史に就いての卑見 伊波普猷

### 解題

三 笈 利 幸

ここに復刻した「郷土史に就いての卑見」は、一九〇六年に東京帝国大学を卒業した伊波普猷が、帰郷して沖縄初の「文学士」としての啓蒙講演活動を開始した最初期の講演がもたになっている。「伊波普猷全集」(以下「全集」と略す)第十一巻巻末の「年譜」によれば、伊波は一九〇七年十月二十八日に第一回琉球史講演を行い、その後次々と講演をこなしていったことが伝えられている。しかし、文字となつて残っているのは、その講演活動を伝える「琉球新報」の記事くらいで、そこで伊波が実際に何を語っていたのか詳細はわからない。一九〇七年七月三日の「琉球新報」は、伊波が北谷尋常小学校で行った「琉球史に就て」という講演について、「上古史中古史近代史に別ちて琉球の開闢以来より廢藩置縣に至る迄の順序を大体に於て述べ更に琉球開闢當時より尙巴志の三山一統に至る間の戦乱時代を説明」したと伝えていて、その内容の一端をうかがい知ることができる程度である。

この記事にある講演の一月ほど後、一九〇七年八月十一日に南陽館で行われた沖縄教育会の席上で、伊波は「郷土史に対する卑見」という講演を行っている。それはのちに「沖縄新聞」に「郷土史に就いての卑見」という題名で掲載された。しかし、この「郷土史に就いての卑見」は、「全集」出版に際しても編者たちには未見のことであった。なるほど「沖縄新聞」は多くが失われてしまっており、私の知る限り、「郷土史に対する卑見」を新聞原紙で確認することはできていない。しかし、調べてみるとたしかに原紙そのものの確認はできないが、沖縄県立図書館所蔵の「東恩納寛惇新聞切抜帳一五」(以下「切抜」と略す)にこううじてその「切り抜き」が残されていることがわかった。原紙から当該部分だけが切り抜かれ、几帳面に貼り付けられている。今回は、これを底本として、復刻を行った。

この「郷土史に就いての卑見」は、「切抜」の見開きで二ページとするページ数——それはゴム印のようなもので見開き左ページの左上に印字されている——で三十四ページから三十九ページに、各ページ三段に貼り付けられている。すでに触れたように、これ自体に日付は存在しないが、「郷土史に就いての卑見」という題名が九回出てくることから、九日間にわたって——それが連日なのか、数日おきかなど、詳細は一切わからないが——「沖縄新聞」に掲載されたであろうことは推測できる。冒頭に付された「二記者」によるリード文に「去る十一日開催の……」とあるところから、直近の八月十二日から連載が始まったのではなく、数日経過した後連載が始まったものと思われる。もちろん、月を書かずにいきなり「去る十一日開催の……」としているところから、どんなに遅くとも八月中に連載が始まったことは確実である。

この「郷土史に就いての卑見」は、一九一一年に単行本化された「琉球史の趨勢」あるいは同年「古琉球」初

版の第二論文として収録された「琉球史の趨勢」とほぼ同じものであることは、一読していただければすぐわかるだろう。そして一九四二年の「古琉球」の改訂によって、ここに復刻した文章は大きく様変わりする。この改訂については、すでに論じたことがあるので、ここでは繰り返さない<sup>2</sup>。

なお、復刻に際しては、できるだけ原文をそのままの状態で再現することに努めたが、変体仮名は現代仮名に、一部の漢字についても現在通常使われているものに改めた。厳密さ、精確さをおろそかにするつもりはないが、一文字一文字の字体にまでこだわるのではなく、ひとまずはともかく原文を正確に読めるかたちにして一般の利用に供しようと考えたのである。また、この復刻を行うに際しては、九州国際大学の学生有志（池邊優介、梅澤隆弘、亀田光彦、中井淳弥、松尾和磨、渡辺恵美）の協力を得た。とくに渡辺氏には原文のデータ打ち込みの一部まで手伝ってもらった。記して感謝したい。この復刻はここに記した学生諸氏の協力がなければできなかったし、また、正確さが担保できているとすれば彼／彼女らの協力によってである。それでもなお誤植や見間違いがあるとすれば、すべて私の責任である。

## 注

1 加えて言えば、この「郷土史に就いての卑見」の直後には東恩納による「四度爲朝傳說に就いて」が貼り付けられ、そこには明治四十年十一月十七日の日付が見えるところから、この連載は遅くとも十一月十七日より前に終わっていたと推測される。もっとも、八月に始まり、わずか九回しか連載しなかった論考——それもひとつひとつの部分はかなり短い——が、九月、十月、十一月と足かけ四ヶ月にわたって連載されるとは考えにくく、この箇所を参照せずとも、「郷土史に就いての卑見」の連載

は、あまり間を空けることなくまさに連載されたであろうことは確実とみていいだろう。それにしても、この「切抜」全体にわたって几帳面に切り貼りをし、日付を書いている東恩納が、なぜ「郷土史に就いての卑見」だけ、日付も打たずにただただ切り抜きを貼り付けただけなのか、不可解である。

2 三宮利幸二〇一〇「伊波普猷と「同化」の暴力——一九一〇年前後の思想を考える」(『九州国際大学教養研究』第十七巻第一・二号合併号) 参照。

## ●郷土史に就いての卑見

去る十一日開催の縣教育會席上に於て述べられたる伊波文學士の演説は單に數十行だけ要領を掻い摘まむには却つて不得要領に陥る虞あり故に今後數回其の大意を連載することとせり(一記者)

私は今日郷土史に就いて鄙見を述べ度いと思ひます即ち琉球史上の代表的人物が自國の立場に就いて如何なる考へを懷いて居たかと云ふことをお話致さうと存じます。一体世の大方の人は琉球史上に於て特殊の時代の人民がはたらし又考へた結果のあらはれ居る所のものを見て直ちに琉球史を一貫せる精神を捕らへようとする傾きがありますがこれは餘り宜しくないことで御座います島津氏の琉球征伐とか廢藩置縣とかいふやうな社會の秩序の亂れた時代に於ては大概感情が働き過ぎて衆愚は正當に時勢を解釋することの出来ないものであります偉大なる人物は如何なる時代に於ても理性を失はないで正當に時勢を解釋し且つ衆愚を誘導して之れに處する道を知らしむるものでありますから吾人はかゝる人物の考へやはたつきによつて沖繩人の眞面目を知らねばならぬ今こゝに向象賢や蔡溫の如き代表的人物

を紹介するに先ちて沖繩人が他府縣人と祖先を同じうする者であるといふことを述べる必要がありますがこれは會つて新聞紙や講演で申述べたことが御座いますからこゝには申上げません、とにかく今日の沖繩人は紀元前に九洲の一部から南島に殖民した者の子孫であるといふ丈けを承知して貰ひ度い、さてこの上古の殖民地人は久しく本國との連絡を保つてゐたが十四世紀の頃に本國の方では南北朝の戦亂があり自分の方でも三山の戦亂があつた爲に本國との連絡は全く断絶してつたこの時に當つて沖繩人は支那大陸に通じて臣を朱明に稱し盛に其制度文物を輸入したのである當時の沖繩人はやがて支那人に扮したる日本人であつたのであります十五世紀に至つて沖繩に尙巴志といふ一英傑が起つて三山を一統した時に久しく断絶してゐた本國との連絡は回復され支那及び日本の思潮は滔々として沖繩に入り十六世紀の初葉に至つて沖繩人は日本及び支那の文明を消化して沖繩的文化を發揮させた是即ち尙眞が中央集權を勵行した代である沖繩の萬葉とも云ふべきオモロが盛に歌はれたのも此時代で■(欠損していて確認できないが、ほぼまちがいなく「あ」)る沖繩語を以て金石文や消息文を書いたのも此時代である而して此精神は遂に發して南洋との貿易となり山原船は遙にスマトラの東岸まで航行して葡萄牙の冒險家ピントを驚かしたのであります沖繩人は此時代に於て既に業に勇敢なる大和民族として恥かしく無い丈の資格を顯したのであります所が兩帝國の間に介在してゐるの悲しさ沖繩人は充分にその本領を發揮する事が出来ないで漸く機械として取扱はれるやうになつた即ち島津氏は沖繩の位置を利用して當時鎖國の時代であつたに拘はらず琉球の手をとうして支那貿易を營んだのであります併し此頃薩摩と琉球との關係は至つて收斂な者でありましたが豊太閤が朝鮮半島に用ゐた勢力の餘波は間もなく慶長十四年の琉球征伐となつてあらはれて來ました是れやがて薩摩と琉球との經濟的關係を一變して政治的關係となすの關節である以後征服者たる薩州人は被征服者たる沖繩人を同胞視しないで奴隸視する様になつたさうして此の感情が三百年

後の今日に至るまで遺傳的に鹿兒島人の頭にのこつてあるといふことはいくらか事實である一寸横道に道入りました  
が沖繩の方では古來國子監や福建あたりで學んで歸つた久米村人が支那思想の代表者で鹿兒島で學んで歸つた留學僧  
の連中が日本思想の代表者であつたが慶長の頃に至つては此儒家と僧侶とが自分等の職業を離れて政治に嘴を容れる  
やうになつてゐたのであります慶長十四年の琉球征伐は畢竟二思想最初の大衝突に過ぎないのであります (未完)

### ●郷土史に就いての卑見(承前)

かういふ場合に天下の大勢に通じ自國の立場を知る經世家がゐて能く此二思潮を調和して民衆を誘導していつたなら  
ば此の禍を未然に防ぐことが出來たに相違ない惜い哉かういふ人物は當時一人もゐなかつたので御座いますこの戦争  
の結果として尙寧王以下百餘名は捕虜となつて上國し機敏なる薩摩の政治家は思ふがまゝにその主な琉球を経營致  
しました尙寧は俘囚となつて薩摩に在ること三年漸く許されて母國に歸りましたがながら島津氏の殖民地に身を寄  
する一旅客の様であつたといふことで御座います併し乍ら島津氏は決して琉球王國を破壊することをしないでその形  
式丈を保存して置いて之を支那貿易の機關に使つたのであります征服後琉球王をして不相變明帝の冊封を受けさせた  
のもこれが爲であります諸君もし支那の冊封使が渡來する毎に二三百人の氣の早い薩摩人が支那人に見られまいと思  
うて半年餘の間今歸仁や城間に潜んでゐたといふ事實をお聞きになつたら思半ばに過ぎることがありませう沖繩が薩  
摩と交通してゐるといふことを隠蔽するといふことは啻に沖繩の爲であつたのみならず又薩摩の爲であつた沖繩人は  
かういふ風にして支那に近づき之によつて得たる所の利潤の過半を島津氏に納めその残りを以て自立して來たので御

座いますが間も無く支那には明清の大亂が起つて沖繩人は二三十年間も支那に往くことが出来なくなりましたこれは實に沖繩に取つて苦痛であつたのみならず島津氏に取つても亦苦痛でありました此の時代のことを俗にフタカチャの御代と申しまして支那に使節に遣られるのを是非に嫌つたさうで御座います此の時代の沖繩人は殆ど支那と云ふ考へが薄らいで來て日本といふ考へが深くなつて參りました丁度日清戰頃の沖繩の様な状態であつたかと思ひます兎に角沖繩が薩摩に對する惡感情は漸く和ぎましたが經濟上の困難は増して參りました此の時の有様及びかういふ時に處する道を蔡温はその獨物語の中に

唐世替（革命）程之兵亂差起り候はゞ進貢船差遣候儀不能成或は拾四五年或は貳拾年參拾年も渡唐絶行仕儀案中に候御當國さへ能々入精本法を以て相治置候はゞ至其時も國中衣食井諸用事無不足相達尤御國元への進上物は疏物計にて教調達其御斷申上可相濟積に候若御政道其本法にて無之我々之氣量才辨迄を以相治候はゞ國中漸々及衰微御藏方も必至と致當迫候儀決定之事に候右之時節渡唐及斷絶候はゞ御國元へ進上物の儀疏物調も不能成言語道斷之仕合可致出來候

と書いてゐます沖繩の立場は實に苦しい立場であつたのであります（未完）

### ●郷土史に就ての卑見（承前）

沖繩の立場が以上申述べた通りであつたのであるから沖繩人に取つては支那大陸で何人が君臨してもかまはなかつたのであります後世靖南王が叛した時の如き琉球の使節は清帝及び靖南王に奉る二通りの上表文を持參して編輯を學ん

だことも御座います又平常でも使節は琉球國王の印をおした白紙を持参していざといふ時にどちらにも融通のきく様にしたとのこと、此紙を稱して空道コウダウと申します沖繩人の境遇は大義名分を口にするのを許さなかつたのである沖繩人は生きんが爲には如何なる恥辱をも忍んだのである「食を與ふる者は我主也モクヲクニスドワウオシユ」といふいま／＼しい俚諺もかういふ所から出ただらうと思ひます誰が何と言つても沖繩人は自ら此境遇を脱することが出来なかつたのであるこれが廢藩置縣に至るまでの沖繩人の運命であつたのであります、ところが明朝が亡んで清朝が興りましたので沖繩は暫らく名實共に日本に屬するやうになりましたので薩摩の方でも如何に琉球を採つて可いやらわからなかつたのであります島津氏の方にも機を觀て琉球の兩屬を止めしめようと圖つた人がゐたと見えて十九代の君主光久のごときは正保三年には明國が政を失して戦亂が止むことのないのを聞いて此際意を決して沖繩を處分せんことを幕府に諮つたこともありました又明暦元年には愛親覺羅が支那一統の餘威を以て新に使節を沖繩に派遣するといふ噂を聞いて沖繩をして清との關係を開くやうなことの無い様にさせて貰ひ度いと幕府に願うたこともありましたが若し此時島津氏の建議が採用されたとしたら沖繩は二百年前に支那との關係を絶つてゐたのでありませう併し乍ら徳川氏の平和政策は此の新興の強國と國璽を開く(こくきをひらく…國家間に摩擦がおきる)ことを恐れて斷然たる措置に出づることが出来なかつた沖繩は依然として清の冊封を受けて其正朔を奉ずる様になつたこと、諸君は日清戦争の頃まで清國を慕うてゐた所の久米村人が當時どんな態度を取つてゐたかといふことを問はれるかも知れない王代記によれば彼等は寛文の頃まで大明の衣冠をつけてゐたが寛文三年清國の使が琉球に來た時始めて片髪かたがはを結んで國俗に順つたといふことであります彼等は實にその母國朱明の滅亡を嘆きつゝあつたのである以上御話申し上げたことで日支兩國の間に於ける沖繩の位置はおわかりになりましたらうこれから本論に入つて向象賢や蔡温がこの間に處していかにかへ、又はたらい、たかといふこ



とお話致さうと存じます

### ●郷土史に就ての卑見（承前）

明國の滅亡後暫らくの間島津氏が琉球の處分に困つてゐたことは前に申述べましたが琉球自身は尙更自身の處置に窮してゐたので御座います當時具志川王子尙亨といふ賢相があつて政治を執つてゐましたが餘程の道徳家で時の人は之を聖人と稱へてゐました或時罪人が死刑の宣告を受けたところで尙亨聖人もこのことを知つてゐるかと思つた官吏が聖人も能く知つてゐるとの答を聞いて罪人は安心して刑に觸れました尙亨はとにかく偉い人でありましたが當時の琉球をいかにして處置して可いやらわからなかつたのです或時三四歳位の男の兒が乳母に抱かれて京太郎キョウタロウを見てゐましたが尙亨がつらくこの兒の腫を視ていふにはこんな器量の優れた兒は昔つて見たことがない後日我に繼で政柄マツを乗り沖繩に金の輪ワをはめるのは此兒であるといつたといふことで御座います此輩嬰兒こそは他日薩州と沖繩との精神的連絡を結んだ所の羽地王子向象賢で御座いますこの話は決して通常の話と考へてはいけません個中尙亨がいたく沖繩の將來を氣遣つて誰か自分より偉い政治家が出てゝ時勢を解釋して呉れゝば可いがとあせつた心が能く現はれてゐます向象賢は果して沖繩に金の輪ワをはめました彼れは國相になる三年前即ち慶安三年始めて沖繩の正史中山世鑑を編纂して自國の歴史を教へ後「仕置」といふ政治的隨筆を物して其の政見を述べました「仕置」は實に後世爲政者の金科玉條として遵守する所の者であります向象賢は劈頭第一に先づ國相具志川按司の跡釜に就いて大和へ伺つたら自分に仰せ付けられたといふことを書いてゐます今此の書を通讀して向象賢の眞意のある所を見ると頻りに「大和の御

手内に相成以後四五十年以來如何様御座候而國中致衰微候哉」と嘆じ征伐後士族がやけになつて酒色に耽り社會の秩序がいたく乱れたのをこぼしてゐますさうして之を救ふには經濟上その他のことに於いて消極的手段を用ゐる又薩摩と沖繩との間の精神的連絡をつけることを得策と思ひましたこゝには後のことのみを申述べます諸君は言語の比較から日本人と琉球人とが同一の祖先を有するものであるとの説を始めて稱へたる人を英國の言語學者チャムブレンと聞いて居られるかも知らんがこれはチャムブレンではなくて吾が向象賢であると信じて貰ひたい向象賢はその「仕置」の中に

竊惟者此國人生初者日本より爲渡儀疑無御座候然者末世之今に天地山川五形五倫鳥獸草木之名に至る迄皆達せり雖然言葉の餘相達者遠國之上久敷通融爲絶故也五穀も人同時日本より爲渡物なれば云々

と書いてゐますチャムブレン氏は十數年前沖繩にこられた時縣廳の琉球史料の中でこの記事を見られたに相違ないがどういふ譯かその著書の中には向象賢の名を紹介して居りません當時沖繩人は心中まだ薩摩を惡んでゐましたから向象賢の人種論は二者の感情を和らぐるにあづかつて力があつた者であります加之彼れは「仕置」の中に士族として學文、算勘、筆法、謠、醫道、庖丁馬乗方、唐樂、筆道、茶道、立花等の中一つでも嗜まないものはどんな身分の善い者でも官吏に採用しないぞといつてゐますその謠、茶道、立花の如き日本の技術を奨勵した所などは餘程面白い所で諸をうたひ花を活け茶を呑んでゐる間に沖繩人は大和心になつて了つたのであります此の向象賢のやり方を見て單に薩摩に對するおべつかと思つたら大變な心得違ですよしおべつかと見る人がゐたらそれでもかまはない道徳上おべつかをつくことを許す例外があつたとしたらそれは向象賢の場合であるだらうと思ひますそれまでは薩摩と沖繩との關係は經濟的政治的でありましたが此に於て此の上精神的となりました彼れは又

右七ヶ年の間夜白盡精相勤候付國中之仕置大方相調百姓至迄富貴に罷成候儀乍、憚、非、獨、力、哉、と存候依之根氣疲果候且復老衰極致勤仕時節到參候故斷申候憐愍被思召赦免可被下候左候而二三年も存命致隱居休息之躰にて奉行仕度左候はゞ本望不可過之と存候、拾年、貳拾年、勤候人も僅此中之七ヶ年には不可勝候頃日内證より右斷之段申上候處先以被召留候返事被下候此趣を以宜敷様願存候以上

と三司官にやりました如何に此の献身的の政治家が七ヶ年の間に制度を改め政綱を張り農務を起し山林を開き島津氏の征伐後の財政を整理するに人並ならぬ働きをなしたといふことがわかります而して彼れはその残りの三年の間は専ら教化事業に力を致したので御座います「仕置」の結尾の所に

右之仕置大方に候而御國元より國之下知未斷之故國俗壞行候儀役人之曲事と被仰付候はゞ我々可及迷惑候間前以申出候若恨に被存人は羽地合手に可成候少も一身惜不申候國の恥辱には出間敷候如何様返答可承俊

と書きました千鈎の重みのある所です彼れは實に尙亨が豫言した通り沖繩に金の輪をはめて寛文十四年に此の世を辞した而して他日此の基礎の上に近代の沖繩を建設すべき蔡温はまだ母の胎中にも宿らなかつた蔡温は實に彼の死後八年にして呱呱の聲を挙げました

### ●郷土史に就ての卑見（承前）

すべて社會の事はその方針を定めるのが六ヶしい、その方針さへ定まつたら格別間違つたことをしなければ自ら時勢が導いてくれるので向象賢死後の沖繩はトン／＼拍手で向象賢が指定した方向に進んだので御座います向象賢の死後

日本との交通が頗る頻繁となつて王子や貴族の連中が年毎に薩摩や江戸へ出かけるのが多く支那との往來も昔のやうに續けられて親方や官生の連中の支那に遊ぶもの少くはなかつたさうして當時沖繩人が往來をしてゐる兩國を見るに一方は八代將軍幕府中興の時で一方は清の聖祖が兵革を収めて文學を奨励するの秋で就中江戸及び北京の文運が將に花を開かうとした時には自家も亦古今未曾有の黄金時代に到達してゐたので御座います是れやがて兩國の文明が海南の小王國に於て相調和したのである沖繩は此時程澤山の人物を出した例がありません古今獨歩の政治家と呼ばれる具志頭親方蔡温も日本の學者室鳩巢をしてその著書六論衍義を和文に譯させた名護親方程順則も沖繩で始めて詩を作つた玉城朝薫も苔の下若草物語萬歲貧家記兩夜物語を物した平敷屋朝敏も仲島のよしや恩納なべのやうな女詩人もこの時に輩出致しました又久米村の方にも無數の漢詩人が輩出致しました恩納なべが

波の聲もとまれ風の聲もとまれ首里天加那志みおんき拜ま

と謳歌した時代は即ちこの時代で御座います而して吾が蔡温は實に此の時代を代表する所の偉大なる人物です彼は島津氏の琉球征伐の時に殺された若那親方鄭廻の産地久米村に呱呱の聲を擧げた者で明の洪武年間支那思想を齎らして沖繩に歸化した所謂三十六姓中の門閥宋の蔡襄が子孫で御座いますが政治的天才を有してゐたので格外から拔擢されて三司官となつた者で御座います彼れは向象賢とは反對で支那系統の人であつて而も福建で學んだ人ですが彼の眼光は夙に沖繩の立場を洞察し向象賢の政見を布衍してあます諸君若し彼が書いた「獨物語」や「教條」を御讀みになつたらその注意の永遠に涉りその政「略」か?の心切なる眞に琉球第一の政治家として又或意味に於て一個の外交家として眼の玉の黒い間民衆を誘導し教訓し沖繩群島の住民を可憐なる状態から救うたといふことが御わかりになりませう彼れは向象賢よりもヨリ大なる時勢の解釋者でありました彼れは時勢の謳歌者ではなくて寧ろ時勢の作爲者で

ありました向象賢は沖繩を經濟的に救うて更に沖繩人の向ふべき方針を暗示致しましたが蔡温は向象賢が造つた餘裕を利用して沖繩をしてたゞ租税を拂うて生きるといふ外に更に人間としてなさなければならぬ事が澤山あるといふことを教えました彼れの獨物語はまさしく向象賢の仕置をまねて書いたのですがその中に自國の立場についての考へを露骨に言ひあらはしてゐます

毎年御國元へ年貢米差上候儀御當國大分御損亡の様に相見得候得共畢竟御當國大分之御得に相成候次第誠以難盡筆紙譯有之候往古者御當國之儀政道も然々不相立農民も耕作方致油斷物每不自由何篇氣儘之風俗段々惡敷剩世替之驅動も度々有之萬民困窮之仕合言語道斷に候處御國元之御下知に相隨候以來風俗引直農民も耕作方我増入精國中物毎思儘に相達今更目出度御世に相成候儀畢竟御國元之御蔭を以件之仕合筆難盡御厚恩と可奉存候此段は御教條も委細記置申候

實に其通りである蔡温や向象賢が薩摩の事を御國元といふたのは餘程味のあることです獨物語の中に支那に對する蔡温の考のあらはれてゐることは前に御話し申しましたが彼はその外に島津氏が許す範圍内に於て支那の制度文物を輸入して三十六島の人民を教化して理想的の國を建設するといふ考を懷いて居りました彼れは實際この兩大國の間に介在して出来る丈のことはなしたので御座います併しながら彼れが「往古之聖人も政道之儀は夜白入精候惟假令は梶手繩にて馬を馳せ候儀同斷と被申置候」といつた通り琉球政治家の苦心は一通りではなかつたと思ひます世界氣の毒な政治家多しと雖沖繩の政治家程氣の毒なのはゐないかと存じますかの戦々競々として薄氷を踏むが如しといふ語は能く沖繩政治家の心事を形容することが出來ます併しながら獨り蔡温は彼れの生涯中少しも困つたといふ風をあらはしてゐないこれが蔡温の偉大なる所です（未完）

## ●郷土史に就ての卑見（承前）

蔡温時代のやうに二個の思潮が調和してゐる時分には衆愚は動もすれば各其好む方に偏して自國の日支兩國に對する關係を正當に觀することが出来ないのである若し之を自然に任して置いたならば兩大國の形勢が一變した暁には沖繩は再び慶長十四年の時の様な悲境に陥ることがあるので御座います蔡温は早くもこゝに氣がついて獨物語を物し御教條を發布して沖繩が日支兩國に對する關係の輕重如何を極めて叮嚀に教えましたがその眞意を解するものが至つて少く士族の連中は何づれも四書五經ばかりを金科玉條として遵守し御教條や獨物語を百姓の教科書として輕蔑するやうになりました惜しみて猶餘りあることで御座います吾が蔡温は其獨物語の中に

國土之儀眼前之小計得<sup>はからえ</sup>にては絶て安堵之治龍成不申積に候依之政道と申は必國土長久之御爲に大計得を第一に心掛

相働申由聖人被教置候

といった様に一二百年後のことまで考へてゐたので御座います實際彼れはゆく／＼は琉球は全く支那の手を離れて専ら日本に屬するやうになるだらうとの豫言をしてゐます此事は記録にも何にも書いてありませんが彼が尙敬王に申上げた訓言として尙敬王以來口々に傳へられて今日に至つたのがありますそれは支那との事はさう六ヶしなくはいが日本との事は随分六ヶしい他日一片の書狀で國王の位を失はねばならぬことがあつたとしたらそれは日本の方から出るだらうとの事で御座います成程其通りでした此語は確かなる筋から私の耳に這入つたことですから決して嘘でないといふことを誓つて置きますよしや此語がなかつたとしても獨物語を熟讀された方にはかういふことはとうに蔡温が考へたことだといふことがおわかりになりませう蔡温は其獨物語や教條に於て爲政者のとるべき方針を規定して置きま

したが猶平常の事務に關しても細しく記載して置いて其死後どんな人が三司官になつても之を續きさへすればどんな時でもまごつくことのないやうにしたとのことですから沖繩最後の政治家宜灣朝保氏は蔡溫以後は四人の三司官がゐたといはれたさうです實際三司官は三人しかゐないが死んだ蔡溫が生きた三司官と一緒に政治を執つてゐるとのことですすなはち蔡溫の肉体はとうに朽ちて了つたが蔡溫の精神はとこしへに生きてゐるとのことです蔡溫は實に好個の知己を得たと云はなければなりません宜灣朝保の出現も亦偶然ではなかつたので御座います星移り物變り世は御維新となりました即ち日本人は國民的統一をなすべき機運の到來を自覺するやうになりましたこの時にあたつて沖繩人の心中に當然起るべき疑問は自國の運命はどうなるであらうとの事であつたに相違ない併し乍ら古往今來めつたに疑問を起すことを知らない沖繩人はこの大問題に就いても亦無頓着であつたので御座います前にも申上げた通り所謂琉球王國は慶長以後は日本の一諸侯島津氏が故更に名に於ては支那に實に於ては日本に屬せしめて私かに支那貿易を營む爲に存在させた機關に過ぎないのであるからその存在の條件がなくなるや否や動搖を來すのは當然のことで御座います御維新になつた結果琉球は最早島津氏の機關でないやうになつて當然帝國の一部分たるべき性質の者となりましたので遂に琉球處分といふことが起つて參りました沖繩人に取つては寢耳に水であつたので御座いますこれやがて日本思想と支那思想との最後の大衝突であるかういふ時に際し人は往々にして大勢の推移を知らないで前後を同一時代と観ずることがあるこゝに於てか人と時勢と相副はずその間に扞格を來すのであるこれ社會に保守黨の起る所以であるこれ社會に擾亂の避くべからざる所以である宜灣朝保は此間に立つて時勢を解釋し輿論を無視して沖繩を今日の様な位地に置いたので御座います而して彼れは非常なる迫害を受けて明治九年憂を懷いて死にました沖繩人はもとよりこの不幸の政治家を敬慕しなければならんが他府縣人も少しは同情を寄せて欲しいので御座います吾が宮内省の方でも

まさか此人の功績を忘れたのではありますまい。以上向象賢や蔡温や宜灣の如き代表的人物がいかに沖繩の立場に就いて考へ又いかに此間に立つてはたらいたかといふことを御話申しましたがこれからは少しく私の意見を申述べ積ります。

正誤 前号に始めて詩を作った玉城朝薫とあるは始めて劇詩を作った玉城朝薫の誤り

### ●郷土史に就ての卑見（承前）

つらく琉球史の趨勢を見るに向象賢や蔡温や宜灣の案内するが儘に歩み、安全なる世界の大勢といふ潮流に向つて進んだので御座います。而して吾等は此大海のたゞ中の甲板の上に立つて吾等を出口迄引張つて来たところの三人の恩人を顧みて轉だ感謝の念を熾にしてゐるので御座いますかつて向象賢や蔡温や宜灣と共に窮屈千萬なる生活をこぼしてゐた所の沖繩人は今や天空海闊なる生活を樂むやうになりましたこの歴史の壓迫を取り去られた所の沖繩人が三（おそろく）印字が悪かったためであらう、「二」のように見えるが、「三」が正しい）人者が言はんと欲して言ふ能はざりし所を言ひ爲さんと欲して爲す能はざりし事を爲しうるといふことは當然の事である併し乍ら沖繩がかういふ所に到達する迄には幾多の困難に遭遇したといふことをを知らねばならぬこれらの苦しい経験も亦沖繩發展の一要素になるといふことは愚鈍なる人には一寸わかりにくい所で御座いますそれはさておき世界の大勢日本の革命琉球の弊政は皆琉球の處分をたやすくさせた所の者で御座いますが向象賢や蔡温がつくつた歴史の趨勢は更に之を容易ならしむる者



でありました奈良原知事もおつしやつた通り琉球問題は實に能く朝鮮問題に似通つてゐます是は歴史家のとうに氣がついてゐることで御座います恐らくは現今日本の政治家は慶長以來琉球で得た所の經驗で以て朝鮮を経営しつゝあるので御座いませう朝鮮の今後の「成」か?も大方想像することが出来るので御座います併し乍ら二者は現象の類似であつて實質は大に異なる所があるので御座います歴史の趨勢といふことを頻に申し上げる様ですがこれは能く味つて貰ひ度いのです琉球征伐時代に出来た喜安日記を續いて見るのに「古考人云唐を祖母の思をなし日本を祖父とせよと云り」といふことが御座いますが明治初年頃の沖縄人は「唐を母の思をなし日本を父とする」といふ様にいつたので御座います二三百年の間に祖父母の關係が父母の關係になつたのを見て歴史の趨勢を見ることが出来ます琉球處分は實に迷兒を父母の膝下に連れて來たやうなものですところがこの琉球民族といふ迷兒は二千年の間支那海中の島嶼に彷徨してゐたに拘はらずアイヌや生蠻みたやうにピープルとして存在しないでネーションとして共生したのです彼等は尙家を中心として小刀細工をやつた萬葉集に比較すべき詩歌を歌つたマラツカ海峽の邊まではつて行つた又彼等の北方の同胞がかつてなさなかつた所の自國語で以て石碑を刻むといふことさへなした彼等は實に物質的にはた精神的に社會を形くるべき能量を有してゐたので御座います萬象の進化は不滅なる恒力の効果たる一定の加速度を以てするのである沖縄民族の進歩が獨りどうしてこの加速度の理法にそむく事が出来ようか前時代の制度文物なく又向象賢や蔡溫の網細工なくしてどこに沖縄があらうか嚴格なる意味に於ての沖縄はアミキヨ以來凡ての人の考へやはたつきが積み來つたのであるもつと先きのゝが積み來つたのである個體の享有する仕事即ち經驗は有限なる個體の生存に残存し生殖の連鎖によつて關連する種族の全體に寓して恒久不滅の在存を有するのであるこれは遺傳の理法で御座います加速度は段々つにつて來るさうして過去に於ける如き抵抗といふことがまつたく絶滅或は減退したのである

今日以後の沖縄人に向象賢や蔡温以上の仕事が出来るのは火を賭るより明かで御座います産業といはず文藝といはず今後沖縄人の向ふべき所は多方面で御座います私は以上申上げた理由によつて郷土史の偉人を尊敬するので御座います決して崇敬するものではありません畢竟之によつて吾が腦力を信するのであつて之を誇るのではないといふことになりまず私は斷言します沖縄人は過去に於てあれ丈の仕事でもなしたからその他府縣の同胞と共に廿世紀の活舞台に立つことが出来るのであるアイヌを御覧なさい名義に於ては沖縄人よりも長い以前に日本國民の仲間入りをしてゐます併し乍ら諸君彼等の現状はどうです矢張りブルとして生存してゐるではありませんか私の寡聞なる未だアイヌが王國を建設したといふことを聞きません實際に於てアイヌの故郷は沖縄人のそれよりも自由なる活動をなすに適してゐる所なるにも拘はらず彼等は熊を追ふより外に活動をしておりません彼等は一の向象賢も一の蔡温も有しなかつたのである若し働く範圍や仕事が小さ過ぎると云のなら首里城中にをつて經營をしてゐた所の向象賢は小さいかも知れぬ併し乍ら江戸や北京の間を往來してゐた蔡温の活動は小さいのではなかつた失禮ながら明治以前の日本の政治家よりも遙に活動してゐる若し彼を檢束してゐた運命の繩をゆるめたらば彼れはいかに活動したかも知れない諸君少しく同情の涙を以て沖縄の偉人の人格と事業とを見て被下前にも申上げた通り蔡温は精神的に死んでゐない彼れは沖縄民族を理想の境に導かんが爲に生きてゐるのであるこれから明治十三年以後に於て日本政府が如何に琉球を社會化したかといふことを御話し致します(未完)

## ●郷土史に就いての卑見（承前）

沖繩の最近世史は社會學に於ける所謂社會化の適例で御座います社會化と申すのは或社會が個人若くは群の一體若くは他の社會を化して自個の社會の成分若くは部分と成す事業のことであつてその作用が自衛的と他攻的の二つに分れます前にも申上た通り沖繩人は本國の建國以前に南島に分れて來た日本人種の一支部で御座いますが二千年の間に自然變種になつた者であるといふことは誰れにもわかる話で御座いますこの變種のことは大體御話申上げた積りですがこゝに社會化のことを述べる前に知つてゐなければならぬことを御話致しませう沖繩の立場が既に申述べた通りでありますから沖繩人が日支兩大國に對する感情は親むと云ふよりは寧ろ畏れと云ふことであります就中薩摩に對する感情はさうで御座いましたかういふ有様でありましたから沖繩の親しい感情は凡て彼等を導く所の尙家に向つて傾注されたので御座います此感情が段々つにつてきて忠義となり遂に世道人心をつなぎとめる所の繩となつたので御座います實に明治の初年まで政治及び社交の中心であつた所の尙家はやかで沖繩全体を代表してゐたので御座います故に琉球史に於ては沖繩といへば直に尙家と心得ても大なる間違はありませんさて琉球處分といふ政治的津浪によつて尙家は最早政治の中心でない様になつたが尙ほ社交の中心を維持してゐた所の尙家は自個存立の基礎を揺かし存立の要性を弱むるが如き日本の勢力に對して之に抗拒する所以の方法勢力と爲るべき自衛的社會化を講じたので御座います即ち日本の社會と接觸するに際し個人の流通からして其統一及び鞏固の幾分弱めらるゝを補ふ爲に協同生活の個人的効果及び社會的效果を該個人に與へてその社交性を發達せしめ兼ねて其調子を同化し社會性を普及して自然的感化を與へなほすゝんで意識的に社會性の把持を期せしめ更に理想的に社會の扶植宣揚を期せしめて飽くまでも

その數百年來の小朝廷を維持せんと力めたので御座います御維新の時に日本國內の各藩でさへ國民的統一の事業に反對して戦つた程ですから半ば外國視されてゐた琉球がかういふことをしたのは決して怪むに足らないので御座います沖繩の方では血を流さなかつた丈それ丈手やはらかな反抗をつゞけて日清戦争に至つたので御座います何人も大勢には抗することは出来ぬ自滅を欲しない人は之に従はねばならぬ一人日本化し二人日本化し遂に日清戦争がかたづく頃にはかつて明治政府を罵つた人々の口から帝國萬歳の聲を聞くやうになつた大勢に抗した義村按司は命のある迄反抗してとう／＼福建で死んだ死んだ死んだのみならず頑固黨の首領といふありがたい名を一人で背負つて死んだ以上は自衛的社會化の例ですこれから他攻的社會化の例を御話致しませう即ち日本人がかういふ自衛的社會化の繩張り内に這入り込んで如何に沖繩を社會化して自個の社會の成分と成したかといふことを御話し致しませう

### ●郷土史に就ての卑見 前<sup>マ</sup>

他攻的社會化といふことはある社會が外に向つて増進的擴大を爲す時に見る所の社會化でありましてこれには積極と消極の二通りがあります積極的社會化は通例單に社會化と申しまして自個以外の社會を化して自個社會の完全な部分とする事で御座います其方法他社會の衆人と我社會の衆人との間に血縁及び生活狀態の關係を通じて他社會の全部若くは各部を我社會の制度の一部若くは一若くは數多として有機關係を成し社交性を彼我の衆人各個の間に普及し併せて彼の個子を我のに同化し我の社會性を彼に及ぼし自然的より意識的に■(不明)に理想的に進ましむるに在るので御座います三百七八十年前にオギヤカモイ(尙眞王)が中央集權を斷行して諸間切の按司を首里に住せしめた時には此

の方法をとつて三山の遺民を首里化したのです併し乍ら積極的社會化の直に實行すべき場合は自個社會と格別異なつたことの無い三山の遺民や社會的抵抗力の薄弱若くは皆無なる両先島その他の小さい島々を社會化する時にこれあるばかりであつて多少の發達を成就せる社會を我に化せむとする場合には必ず先づ消極的社會化を成すの必要がありま

す沖繩の如き二千年間隔離して存在し而も七百年來發達せる社會を形成して盛に自衛的社會化を講じてゐる所の社會を我に化せむとするにあたつて日本政府が先づ消極的社會化を講じたのは無理ならぬ次第で御座います消極的社會化はやがて國性剝奪である日本政府は即ち琉球王國を廢してその國家制度家族制度教化制度經濟制度及び風俗慣習制度を滅却させたのです又衆人社交性の調子の整一を攪乱させて社交性を薄弱ならしめたのです又その理想的社會性を攻撃して地に塗れしめ意識的社會性を攪乱し麻痺せしめて社會性の意識の衆人に存するなきに至らしめ遂に社會性の自然的存在を滅却させようと力めたので御座いますさうして同時に盛なる積極的社會化をなしたので御座います以上はあたりさわりのないやうにわざと抽象的に御話したのでそこで諸君は尙家が政治上の中心でないやうになつたと共に社交上の中心でもないやうにならうとしてゐる重なる理由がおわかりになりましたらうさて沖繩の最近世史に於ける社會化の事をざつと御話致しましたが社會化の仕事も沖繩に於てのやうにかう成功した例はめつたに無いだらうと存じますとにかくかくの如く理想的に社會性の扶植宣揚をなすまでの當局者の苦心も一通りではなかつたが沖繩人の心中にも亦之をして一層容易ならしむるものがあつたといふことを知らねばならぬ是れ社會的抵抗力が薄弱若くは皆無であつたといふことではない化する者と化せらるゝ者との心中に一致するものゝ存在するといふ事がすなはちそれですこれは當局者の大に利用すべき所であつたに拘らず心中却つて之を否認してゐたので御座いますこれやがて歴史的に傳つて來た感情の遺物です明治五年琉球處分に就いての左印の意見を讀んで見ると王を華族に列するは斷じて不

可也抑も華族は神別を以てこれに任じ皇室の藩屏たり今琉球人たる琉球王を以て我華族に列すれば國內の人類に附したる等級に他國人を混ざるものなりと云ふことが御座います大に注意すべきことで御座います私はこの一致した所を大に發揮させるといふことは即ち沖繩人をして最も強固なる日本帝國の一成分たらしめる所以の者であらうと存じます若しこれまでの隋性で當局者や教育家が沖繩固有の者をかたづけしからぶちこはして了ふならばこれやがて兩民族の間に於ける精神的連鎖を斷ち切るのである歴史を無視するのである成程二千年前加速度が小さかつた時にはたやすくぶちこはされたかも知れぬ二千年間の加速度を有してゐる今日ではたやすくぶちこはす譯にゆかぬわれ／＼は最早アイヌや生蠻のやうな野蠻人ではないので御座います

### ●郷土史に就ての卑見（承前）

今先御話申しました通り一致してゐる所を發揮させるといふことは沖繩人をして日本帝國の強固なる一成分たらしめる所以のもので御座いますが其一致してゐない所を發揮させるといふことも亦必要なることと存じますこれは實に文藝の方面に向はうとする沖繩人に取つて唯一なる武器ですこの邊の所は教育家諸君に十二分に研究して貰ひたいのですそれはさて置き私はこゝに當局者が歴史の欠乏からしてこの一致してゐる所を充分に利用し得なかつた一例を御話致しませう波の上の神社は今から四百年前に日本の神を祭つた所であつてつい十數年前までは沖繩人の參詣する者が多くありましたが今日は殆どその參詣してゐるものを見受けませんこれは一体どういふ譯で左様になつたのでせう能くは記憶して居りませんがあれば（本来「丸」が入るべきだが脱落して空白となっている）岡知事がなされ

た大失策だらうと存じます併し乍ら今日に至るまで沖繩では丸岡知事さんは社寺のことで大部成功をされた御方と謳歌されてゐます私も亦當時丸岡知事が在來の神を護國寺の後に移して内地の方から新しい神を迎へられた時の莊嚴なる儀式を見て小供心にゑらいと感じてゐたので御座いますところが沖繩人はあの立派な建物があつたに拘はらず獨りとしてその新しい神に參詣するのがゐないで却つて御寺の後の古い神に參詣をするやうになりましたそして寄留商人や他府縣人の官吏が朝夕得意げに參詣をするやうになりました諸君これは果して成功といはれませうか古い神と新しい神とはもとく同一性質の神ですたゞ當局者のやり方次第でかういふ具合になりました若し史實を充分に調査して波ノ上の神の性質を明かにし單に御宮を修繕するといふ丈にとゞめたならば他府縣人もその祖國の神をこゝで拜むし沖繩人も四百年來の參詣を中止しなかつたであらうと存じますさて此の二民族が同じ神を拜むといふことはなんでもないやうなもので御座いますがその國家教育の上に及ぼす効果は實に夥しいもので御座います成程日露戰爭後は沖繩人の方でも軍人の家族などがそろく波ノ上に參詣し始めたそうですが以前のやうに一般の人がこゝに參詣するまでには餘程長い年月を要するだらうと存じます他府縣人の中には由來人種とか階級とかを無視すべき寺院や教會に於てさへ尙ほ差別の念を滅却する事の出来ない人がある位ですから當局者や教育家は絶えず二者接近の方法を講じなければなりません化された人が親しんで來ても化す人が親しんでくれないければ教化の事業は決して實の擧る者ではないので御座います先達高島講師が心理學の講義で教育家が兒童の心中に美質があるといふことを信じて之を尊敬しなければ眞の教育は出来ないといはれた通り當局者も亦沖繩人の心中に美質があるといふことを信じて之を尊敬しなければ沖繩の政治はとてもだめだらうと存じます又爲政者や教育家が自らその功績を誇ることが流行するやうですがこれは餘りよくない現象かと存じます本縣に於ては決してさういふことはない筈で御座いますが私は諸君が「仕事をする

といふことがとりもなほさず■(報酬か?)である」といふ心になつて貰ひたいので御座います諸君が養成された所の人物はやがて活ける勳章ではありませんか以上私は向象賢や蔡温が自國の立場について如何に考へてゐたかといふやうな琉球史で誤解し易い所を御話致しましたかういふ所は誠に兒童の頭には一寸消化しにくい所ですから沖繩の兒童を取扱ふ人が心得てゐたら澤山だと思ひます郷土の歴史は面白いから知るのではない必要であるから知るので御座います上古史が面白いといふでもない近代史が必要といふでもないある理想に向つて發展せんとする沖繩人にはその社會進化の過程を知るのは必要で御座います社會の進化といふことは唯物的進化ではない亦唯心的進化ではないつまり物心合一的進化である單に産業の發達のみを見てはいけない其文藝の進歩も見なければならぬ尙眞王の事業を研究する人は千五百餘首の詩歌を見逃がしてはならぬ蔡温の仕事の研究する人は玉城朝薫の劇詩を看過してはならぬさういふ風にしたら骨あり肉あり精神ある歴史がわかるので御座います而してこの歴史は沖繩人の種が切れない間は續くので御座います私は郷土の爲に獻身的に働いた偉人の心事を能く解する者は人道の爲に獻身的に働いた偉人の心事を解しうる者と思ひます吾人沖繩人は先づ家の人でなければならぬ然る後に國の人にならなければならぬさうして出来るならば世界の人にならなければならぬ併し乍らクロムエルやワシントンの傳でも讀んだら一躍して世界の人になれると思つたら大なる間違です吾人は祖先より受けた遺傳と周圍より得た經驗とを以て如何にして世に立つべきかを考へなければなりません郷土史は實に此遺傳と此經驗とを吾人に教えるもので御座います郷土史は吾人に退けといふことを教えるのではなくて進めといふことを教えます小さくなれといふことを教えるのではなくて大きくなれといふことを教えます加速度を有してゐる者が障害物に遭遇しない間落ちていくのは當然の理で御座います(をはり)



## 凡例

- ・ 沖縄県立図書館所蔵「東恩納寛惇新聞切抜帳 一五」（複製版）および「東恩納寛惇新聞切抜帳 五」に収蔵されている「郷土史に就いての卑見」を底本としている。なお、前者は原本の写真複製版であり後者は前者の白黒コピー版である。
- ・ 新聞掲載どおりに、題名もその都度そこに書かれているものを記した。題名には「郷土史に就いての卑見」と「郷土史に就ての卑見」との二種類が見られるが、とりあえず「郷土史に就いての卑見」を全体の題名としておいた。
- ・ 変体仮名は現代仮名に改めた。
- ・ 一部の漢字は現在通常使われることが多いものに変えた。
- ・ 欠落部分や判読が困難なものなどについては、丸括弧でくくりゴシック体で注記した。